

入選

小さなやさしさのビー玉

鹿児島県 鹿児島大学教育学部附属小学校 三年

石原 佳夏

「あっ、今日もさいごに乗った。」

わたしは、学校へ向かうバスに乗りこみ、後ろをふり返って、中学生のお姉さんを見た。

わたしがバスに乗るバスでいでは、待つ人が一列にならばずに、バスが来ると入口におしよせるようにして乗りこむ。わたしもバスが見えると、急いでバスでいの前へ行く。バスはいつも、まんいんだ。

さいごに乗ると、ランドセルがじゃまでドアがしまらず、ブーツと大きなブザーが鳴り、運転手さんに注意されることがある。わたしはそれがいやで、人より先にバスに乗りたいのだ。わたしがバスでいに着くと、毎日先に、中学生のお姉さんが小さな本を読みながら、バスを待ち立っている。

ある日、母とバスでいへ行った。その日も、そのお姉さんは先にバスでいに立っていた。その日、学校から帰ると、母がわたしに言った。

「あのお姉さんは、毎日さいごにバスに乗るのかな。小学生の佳夏たちを、先にバスへ乗せてくれているんだね。やさしいね。」

わたしは、母から聞くまで、少しも気がつかなかった。自分がバスに乗ることにひっして、後ろなんて気にしていなかったからだ。

次の日の朝、わたしはいつものようにバスに乗りこみ、後ろから乗って来るお姉さんを見ていると、母の言っていたとおり、お姉さんは小学生が乗った後に、バスに乗っていた。

「あのお姉さんは、佳夏が小学生になってから、毎日小さな心づかいをしてくれていたんだね。小さなやさしさを、毎日佳夏にくれていたと思うと、お母さんはうれしいな。」

と、母が言ったことを思い出した。

わたしは、小さなやさしさのビー玉が、心の箱の中に、毎日一つずつたまっていく様子を思いうかべた。3月になり、わたしの心の箱の中は、ピカピカのビー玉でいっぱいになっていた。

「あのお姉さんは、もしかしたら4月からは、もうあのバスには乗らないかもしれないよ。そつぎょうするかもしれない。会えなくなる前に、おれいを言えるといいね。」

と、母が言った。わたしも、いつかおれいを言いたいと思っていたけれど、話しかけるゆう気が出せずに、3月になってしまった。

「今日こそは、声をかけるぞ。」と思い、お姉さんを見ていると、本を読んでいたお姉さんがふと顔を上げ、わたしの方を見た。わたしはドキッとして、とっさに下を向いてしまった。けっきょく、おれいは言えず、そのお姉さんをバスでいで見ることがなくなってしまった。

わたしは3年生になり、バスでいに1年生が来るようになった。わたしは、まず1年生がバスに乗るのを待ってから、自分が乗るように心がけている。あのお姉さんにもらったやさしさのビー玉を、今度はわたしが下の学年に配っていこうと思う。そして、みんなの心の箱の中をピカピカのビー玉でいっぱいしたい。

2年間、毎日やさしさをくれたお姉さんへ。ありがとうございました。